

〔鹽尻^七〕床に佛畫を掛くるは、禪宗の遺風、床に觀音達磨布袋などの繪をかけて、中央の卓に香花を置も、又禪林の風なりけり、今禪刹年始に、客間一間を拂ひ、觀音の像をかけて、中央の卓に香花を備へ、門家拜年を待を見てゑるべし。

〔橘窓自語^上〕本願寺門跡に、正月元日酒海といふことあり、是は元旦門主に下間何某、たがひて親戀上人の像の前へ酒肴を參らすこと、いへり、彼寺にていたく秘し侍ること、きけり、肴は熨斗蛇とかきけど、さだかには秘事なれば、えらす酒海とは、もとは酒をた、へし器物なるを、いかでこの酒肴供進の事を酒海といふにや。

〔三養雜記^一〕元日にハゼをまく。近きころまで、元日の朝まだきにハゼをまくなはしありて、ハゼ賣といふものあまねく來りしが、いつしか武家にのみその風遺りて、町には賣來らすなりし、これはもと伊豆の三島明神の池の鮎は、明神のつかはしめなるよし云つたへて、毎年元日池の鮎に、ハゼをまきてあたふる神事あり、元日にハゼをまくことは、かの神事起源なるべしと、伊勢安齋の説なり、又ある人の説に、むかしはハゼにする料の餅米をもとめて、家々に煎り試むるに、よくハゼる年は吉、ハゼのあしき年は凶なるよしを占ふことなりしが、後には只ハゼを買てまくことを吉兆とするのみなりしといへり、按に、戒菴漫筆に、東入吳門十萬家、家々爆穀卜年華、といへるは、爆字婁の詩なり、これを併せおもへば、和漢一般の風習にて、ある人の説をよしとすべし。

〔守貞漫稿^{二十六}〕元日昔ハ毎戸必ラズ粳ヲ買ヒ、爆之テ字婁^{セト}シ、當年ノ吉凶ヲ占ヘリ、其後ハゼヲ賣巡ルヲ買テ、宅裏ニ蒔之、近年ハ武家ノミ行之テ坊間廢之、昔ハゼヲ賣リ巡リシモ、江戸ノミ歟、京坂未聞之、今曉江戸ニテハ、初日ノ出ヲ拜セント、高輪及深川ノ洲先等群集ス、

〔守貞漫稿^{二十六}〕繭玉^{マヒダマ}ノ縁儀物ノ一^{京坂無之}、繭玉ハ土丸ヲ用ヒ、其他ハ厚ク重子張タル